様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ８ 月 ２４ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７９２１７７

研究課題名（和文）糖尿病とその他の疾患を合併する高齢患者のセルフケア獲得に向けた援助方法の探究

研究課題名（英文）Exploration of how self-care assistance towards the acquisition of elderly patients complicated with diabetes and other diseases

研究代表者
麻生　佳愛（Asou, Kawai）

福井大学・医学部・講師

研究者番号：８０３６２０３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：糖尿病とその他疾患を併せ持つ高齢者は、血糖値等指標があるため具体的に気を付けることを指導されている糖尿病の療養行動に関心を向けている。彼らは、これまで行ってきた療養行動が、併せ持つ疾患や加齢に伴う変化により行えなくなることを懸念している。また、糖尿病と他の疾患を併せ持つ高齢者の身体的・心理的状況は変化しやすく、セルフケア学習支援を遂行する上での問題点が出現する可能性があるが、高齢者自身がそれに気づかない恐れがある。看護者が意識的に不都合や不快な症状を把握し、対応することで、２つ以上の疾患を併せ持ちながらも高齢者が持てる最大限の健康状態の維持が可能となると考える。

研究成果の概要（英文）：The elderly person having both diabetes and other diseases turns interest to the medical treatment action of diabetes taught that be careful concretely because blood sugar level has an index to. They are concerned about that they cannot perform the medical treatment action that they went for by a disease to have both so far and aging. In addition, the physical psychological situation of an elderly person having both diabetes and other diseases is easy to change, and problems on accomplishing self-care learning support may appear, but elderly person oneself may not notice it.Thus, I think that maintenance of the maximum health condition that an elderly person can have is enabled while having both diseases more than two by a nursing person grasps inconvenience and an unpleasant symptom and coping.

研究分野：臨床看護学

キーワード：看護学　糖尿病　癌　痴呆　高齢者看護

１．研究開始当初の背景

糖尿病患者のセルフケア支援に関する研究としては、セルフケア向上を支援する教育プログラムの評価効果研究が始められ、患者同士がグループとなり体験を話しあう場を設けることの有用性が示唆されている。高齢糖尿病患者のセルフケアに焦点をあてて行われている研究は、医療機関の外来に通うインスリンを使用する高齢患者のセルフケア上の問題と援助に関する研究（内海他, 2006）やインスリン注射を他者に依存している高齢患者の自己管理支援（平野他，2005）等研究が見られるが、高齢糖尿病患者のセルフケア支援に関しての知見は不十分であり、さらなる研究が必要であると言える。

高齢者の身体的特徴として、記銘力の低下、視力低下、感覚・知覚の低下、手指の功緻性の低下、反応時間の増加、運動機能の低下など、一般的に学習能力は低下する。一方、セルフケアを行うために必要なセルフケア能力は学習することにより修得可能な後天的な能力であると言われている。そのため、高齢者のセルフケア能力を高めるためには、高齢者の特徴および学び方に合わせた学習支援が必要となる。高齢者の特性を生かした学習援助の視点としては、Lebel.J が gerogogy（高齢教育学）という概念を提唱しているが、臨床実践における活用が可能な高齢者の特性を考慮した学習援助方法を明らかにした研究は見当たらない。

また、糖尿病患者の疾病併存状態に関する研究としては、糖尿病を併せ持つ精神疾患患者の研究や、虚血性心疾患と糖尿病を併せ持つ者の研究があるが、高齢者に特化したものではない。

研究者は、「高齢糖尿病患者の学びのプロセスに関する研究」および「がんと糖尿病を併せ持つ高齢患者のセルフケア支援プログラムの開発」のデータ収集のため、高齢糖尿病患者に半構成的面接を行った。その中で数名の対象者から、医療者から受けた教育が自分には適していないという内容の語りが聞かれた。特に、疾病併存状態にある高齢者は、医療者から言われたことを尊守しようとするが故に、生活上の負担感を増していた。また、一方でがんと糖尿病を併せ持つ患者の中には、長い療養体験を生かしつつ自分の生活に合わせたセルフケアの方略を見出す者もいた。年齢を増し、様々な疾患を重複して罹患するに従い、個別性が大きくなる高齢者のセルフケアの特徴をふまえ、高齢者の特性に配慮したセルフケア学習支援を提供する必要があるのではないかと考えた。

２．研究の目的

本研究は、糖尿病とその他の疾患を併せ持つ高齢者が、これまでのセルフケアの経験や高齢者の強み（ストレングス）を生かし、自分の持てるセルフケア能力を最大限に発揮して生活を営めるよう、高齢者に合わせた効果的な学びを支援する方略の開発を目指すものである。

また、これまで研究として取り組まれてこなかった、疾病を併せ持つ高齢糖尿病患のセルフケア学習支援に取り組み、実践者と協働して実践現場に即した看護援助方法を考案する。また、日本の医療現場で活用されるものを目指し、高齢者個々の身体的状況や生活に応じたセルフケア能力を高めることにより、苦痛や生命の危機を招く合併症の予防および健康状態の維持・向上に寄与することを目的とする。

３．研究の方法

（１）初年度は、高齢者およびその他の疾患を併せ持つ糖尿病患者へのセルフケア学習支援に関する文献検討を行う。それに基づき、

臨床現場で行われている教育の現状と、対象者にとって生活に活かせる学びとなっているのかについて、医療者および高齢糖尿病患者を対象として半構成的面接により、セルフケア学習の現在の臨床現場における実態調査を行う。

（2）平成 23 年度以降は、前年度の調査結果に基づき、研究協力者と共に糖尿病とその他の疾患を合併する高齢患者のセルフケア獲得のための看護援助の具体策を見出し、看護援助を実施する。

４．研究成果

（1）セルフケア学習の実態を知るために疾患を併せ持つ高齢糖尿病患者を対象とした「糖尿病とその他の疾患を併せ持つ高齢者の療養生活上気を付けていることと困難について」調査を実施した。

【結果概要】

対象者は 34 名、平均年齢 76.1 歳、性別は、男女 17 名ずつであった。

併せ持つ疾患の内訳は、高血圧(9 名)、悪性腫瘍(8 名)、白内障(7 名)、脳梗塞(5 名)等であり、糖尿病以外に 2 疾患以上併せ持っている者は 25 名であった。

糖尿病と他の疾病を併せ持つ高齢者が療養生活上気を付けていることは、255 コード、30 のサブカテゴリーが抽出され、17 カテゴリーにまとめられた。「カロリー摂取量を減らす」「薬物を指示通り確実に服用・注射できるように自分に合った方法で管理する」「自分の身体状況に合わせて活動・休息のバランスをとる」「転倒・事故・感染を予防する」等がみられた。

疾病を併せ持つことでの療養生活上の困難は、29 コード、11 サブカテゴリーが抽出され、運動器の障害、内部障害により＜歩行等の運動ができない＞＜複数の疾患間の食事の兼ね合いが難しい＞＜運動器の痛みがありフットケアがしづらい＞等 6 カテゴリーにまとめられた。

（2）セルフケア学習の実態について看護師を対象とした「その他の疾患を併せ持つ高齢糖尿病患者への療養行動支援について～看護師の視点から～」の実態調査を実施した。

【結果概要】

① 看護師が捉える療養行動支援について対象者 8 名中 6 名が、周手術期の患者を想起した。130 の一次コードから 56 のサブカテゴリーが抽出され、18 カテゴリーに纏められた。それらは食事、薬物、運動、教育、随伴症状の 5 つに分類できた。食事、薬物に関するカテゴリーは全ての対象者から抽出された。食事に関する療養行動支援は『指示食以外の飲食物摂取時の方法を提案する』等の 6 カテゴリーであった。薬物は『患者の自己管理能力に合わせた与薬の支援をする』等の 2 カテゴリーであった。運動は『併せ持つ疾患の症状に合わせて運動を支援する』等の 5 カテゴリーであった。

② 療養行動支援を行う上で看護師が考慮していた視点について　カテゴリーを糖尿病、併せ持つ疾患、高齢のどの視点から看護師が支援したかを裏付となる認識を踏まえて分類した。糖尿病と併せ持つ疾患を考慮して退院後の生活指導を行ったのは、周手術期ではない事例を挙げた対象者 2 名であった。周手術期の事例を挙げた対象者らの中には『糖尿病と手術の関連性を意識づけられるよう支援する』者や糖尿病のみを考慮して『患者の糖尿病の知識や学習態度を評価する』者がいた。

（３）他の疾患を併せ持つ高齢糖尿病患者への支援の実際

対象は、糖尿病とその他の疾患を併せ持つ高齢者３名に対して、外来通院時の診療後に個別面接により看護支援を実施した。支援の内容は次の３点を柱とした。①糖尿病と併せ持つ疾患に対するとらえ方、受け止め方を傾聴する。②セルフケアの状況と意図を確認する。③対象者の行っているセルフケアを支持しつつ、疾患を併せ持っていることでの不都合や、不快な症状等がある場合は、改善策を共に考える。また、支援前後でSCAQ、PGCモラールスケールを測定した。

３名ともSCAQは点数が上昇したが、PGCモラールスケールは２名が低下した。

【事例紹介】

A氏、83歳、男性。妻、長男と３人暮らし。診断名：２型糖尿病、大腸癌、多発肺転移。2012年11月から2013年４月に支援を４回、実施した。A氏は、糖尿病と大腸癌を併せ持つことでのセルフケアへの支障を認識していなかったが、癌化学療法により末梢神経障害と皮膚障害が出現し、それまで行っていた畑仕事が行えなくなったことに不満足感を抱いていた。また、A氏は、副作用により化学療法が中止されてから、代替療法を心の拠り所としていたが、医師より血糖を100mg/dl以下に保つように指示され、食事制限を自ら厳しく課すようになった。しかし、食前の低血糖症状がみられ始めたため、血糖値を下げ過ぎることは危険であると伝えるとともに、代替療法に対する思いを傾聴し、支持した。SCAQは143から148点に、PGCモラールスケールは11から12点に上昇した。

【考察】

糖尿病と他の疾患を併せ持つ高齢者の身体的・心理的状況は変化しやすく、セルフケアを遂行する上での問題点が出現する可能性があるが、高齢者自身がそれに気づかない恐れがある。そのため、看護者が意識的に不都合や不快な症状を把握し、対応することで、2つ以上の病気をもちながらも高齢者が持てる最大限の健康状態の維持が可能となると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

（１）「看護師が認識する介護施設で生活する糖尿病を持つ後期高齢者のセルフケアの問題」麻生　佳愛，内海　香子，磯見　智恵，大湾　明美，小野　幸子，野口　美和子，日本糖尿病教育・看護学会誌 16(2),133-141, 2012年09月

（２）「糖尿病セルフケア能力測定ツール（修正版）の信頼性・妥当性の検討」清水　安子，内海　香子，麻生　佳愛，村角　直子，黒田　久美子，瀬戸　奈津子，正木　治恵，石井　秀宗，日本糖尿病教育・看護学会誌 15(2),118-127, 2011年09月

〔学会発表〕（計　２　件）

（１）「糖尿病とその他の疾患を併せ持つ高齢者の療養生活上気を付けていることと困難について」麻生　佳愛、浅川　久美子、内海　香子、第17回日本糖尿病教育・看護学会、2012年9月30日、国立京都国際会館（京都市）

（２）「その他の疾患を併せ持つ高齢糖尿病患者への療養行動支援について～看護師の視点から～」山下　有子、松村　亮、伊藤　真由美、宮越　宏幸、小川　奉心、田上　圭子、大西　岩美、山内　順子、仁木　裕美、近藤美穂子、麻生　佳愛、第17回日本糖尿病教育・看護学会、2012年9月30日、国立京都国際会館（京都市）

〔図書〕（計　1　件）

（１）「【今どきの 65 歳以上がわかる　高齢者ケアのキーワードとケース・スタディ 15】ケース・スタディでわかる高齢者と糖尿病糖尿病とその他の疾患を併せもつ高齢者への支援」，麻生　佳愛，糖尿病ケア 10(10), 932,933,962-963,964-965,970-971, 2013 年 01 月

６．研究組織

(1)研究代表者

麻生　佳愛（Asou, Kawai）

福井大学・医学部・講師

研究者番号：80362036